

## ヨーロッパ諸国の博物館視察（2）

著者	大給 近達
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	1
号	3
ページ	657-659
発行年	1976-10-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00004642">http://doi.org/10.15021/00004642</a>

ヨーロッパ諸国の博物館視察

(2)

大 給 近 達\*

チェコスロバキア——プラハ  
国立博物館 (Národní Museum)

スメタナ博物館 (Smetana Museum)

チェコスロバキアの南モラヴィア地方の中心都市、ブルノには国立人類学博物館がある。ナプルステック博物館のキュレーターからも時間があれば是非行くようにすすめられていたが、今回の滞在はわずか2日間に限られていたのでブルノまで足をのばすことができなかった。やむなくチェコスロバキアの博物館視察は、やや部門の違う国立博物館 (Národní Museum) とスメタナ博物館 (Smetana Museum) を2日目に訪問した。

国立博物館はプラハのパーツラフ広場を見下す宮殿を利用した壮麗な建造物である。内部に入ると、エントランス・ホールは宮殿時代の装飾をそのまま残しながら、格調の高い雰囲気構成されている。2階の展示場は自然科学、先史、鉱物学、地質、古生物学、それに演劇関係等の標本が、博物館の見なれたガラスケースに収められ、特に展示のために工

夫された新しい装置などはなかった。しかしこの国立博物館で大変すばらしいと思ったことが2点ある。その一つは、展示説明のためのグラフィック・ディスプレイの美しさと説明内容が観客に対して誠に適切であった。チェコスロバキアの国内経済は、現在決して豊かな状態とは云えない。国営のマーケットの包装紙や領収書は、一度使用した紙の裏側を利用するのが多い。消耗品は節約の精神で過剰なサービスを行わないのが国の経済政策であるようにさえ思えた。だが公共のために必要なサービスには徹底して予算を投資していることがわかる。デザインは博物館内部にいる10名のデザイナーによってなされているが、デザイン計画は研究員とキュレーターとの合議で決められていく。デザインのサイン(記号)表現には、出来る限りヨーロッパの伝統文化が絵文字に利用されながら、しかも暖かみのある構成をとっているのが特色であった。入場券一枚をとっても、本のしおりに使えるほど優れたものである。第二の特色は、キュレーターの説明を容易にうけやすいシステムになっていることだ。外国の来観者が受付に申し出ると英語の話せる通訳が博物館の全般を説明した後、展示の専門コーナーごとに若い女性のキュレーターが待ちうけ、ブースごとに丁寧に解説をしてくれる。わたしの場合は約5時間近くを費して、つぎつぎにキュレーターが交代してくれ、誠に念の入ったものであった。外国からの来観者だけでなく、一般の来観者に対してもサービスは同じだということである。国立博物館の人なつこい歓待を受けた足で、次のスメタナ博物館を訪れた。

\* 国立民族学博物館第4研究部

スメタナ博物館はプラハにきてから、案内書ではじめてその存在を知ったのだが、チェコスロバキアの誇る大作曲家の博物館ということで私には関心があった。現在の博物館はスメタナの最後の住居が博物館になっており、受付と案内を兼ねた老人が一人で管理をしている。いかにものんびりした感じで、誰も来観者がいなかったためかスメタナの作曲した自筆の譜面を説明しながら、カーテンの裏にあるステレオ装置で弦楽四重奏曲「わが生涯より」を聞かせてくれた。スメタナの若い時の写真や家族の肖像画のところに行くと、日本の郷土館にある親しさと同じようなものがそこにあった。案内の老人も彼の一族を紹介するような熱の入れ方で、300m<sup>2</sup>の小さな建物を出る時はプラハの夜の雪がガス燈に照らされていた。

### オランダ—アムステルダム 国立博物館 (Rijksmuseum)

アムステルダムに到着した翌日、最初に訪問を予定していた熱帯博物館 (Tropenmuseum) は、オランダのインドネシア支配当時、収集した幾多の標本資料を見ることができると期待していったが、3月中は内部の大改装工事が進められており閉館されていた。館長やキュレーターにでもせめて面会したいと頼んでみたが、あいにく外国へ出張中とのこと熱帯博物館の予定は断念せざるを得なかった。そこでオランダを代表する国立博物館を訪れてみることにした。

この博物館は1885年カイパーズによって設計された赤練瓦造りの落ちついた建物である。中央のアーケードを通ると、壁面に組み込まれた各種の特別展示の紹

介窓がある。わたしが訪れた時は、日本の茶道についての特展を行なっているところであった。茶室の一部を模型でしつらえ「日本人の心」という標題がつけられている。博物館に入る人は、みなこのアーケードの日本特展案内に足をとめている。後に博物館の東洋美術部のキュレーターに聞いてみてわかったことであるが、最近アジアの精神文化について非常に関心が高まっているということである。これと同じことはチェコスロバキアのナプルステック博物館でも聞かされ、華道ブームが起っているということ思い出した。こうした共通のブームについては本報告とは別に書きたいと思う。

国立博物館は250室に分れ、絵画、彫刻、工芸、東洋美術、民俗等の部から構成されている。全室をていねいに見れば2日はかけなければなるまい。わたしはレンブラント絵画室、ルネッサンス室、民俗、東洋美術部を選んで回った。この中で民俗部は大変興味がひかれるものであった。ここでは展示室全体が時代別に区分された代表的な民家の居間、寝室、食堂、台所を復原している。来観者が展示室に入れば、そこには近世の食堂が復原されており、食卓には当時の料理が食器に盛られている。等身大の主婦が料理の給仕をしている様子もそのまま、臨場感がすばらしい。古い時代の食堂に入れば食器から料理のメニューが違っても一目で理解できる。キュレーターの説明によれば民俗部門の展示は時代、地方、階層による生活の差異を考証することに長い年月を費したということであったが、その効果は高く評価されてよい。展示に関する説明はただ時代と場所だけが記されている。外国人にとっては寝室の

ベッドが極端に短いので、どうして寝るのだろうといった疑問について説明されていないのが不便であった。わたしは巡回している守衛に尋ねて理解できたのであるが、地方によっては寝る時、足をまげて寝る習慣のあることや引出しのように伸縮可能なベッドのあることも知った。民俗部の展示は原則としてオープン（手で触れることができる）システムなので、守衛が実際に動かして見せることができた。住居を中心とした家具、調度品の展示はジオラマ構成の生活復原とは大変意味の異ったものを感じた。それは空間装置（具体的な部屋）を使って時代と地域に特色づけられた道具と配列を観客の自由な視点から読みとらせることができるからである。この点で居住空間の復原は生きた収蔵展示の機能をはたしているように思えた。

今回のヨーロッパにおける博物館視察は、展示施設や情報処理サービスの実態を把握することが主眼であったが、わた

したちの研究部で企画している展示内容の中で、ヨーロッパをどのように把えていくかということも大きな関心であった。各国の博物館の中で、民族学関係の専門博物館を除けば、次に国立博物館を視察の対象として選んだ理由は、自国の文化をどのように見ているのかを知りたかったからである。わたしにとっては各国の自文化に対する見方からヨーロッパを見渡す手懸りがつかめればよいと考えていたのである。しかしこの期待は限られたヨーロッパの博物館を巡って、半分も充たされなかった。国立博物館にはキリスト教関係のイコンをはじめ歴史的に貴重な十字架や宗教用具が必ず展示コーナーとして用意されていた。しかし博物館の展示の視点はあくまでもヨーロッパにおける自国の座標点を強調することに力点が置かれ、日常の習俗の中にある共通的なものは触れられていないことを強く感じたのである。